

今回は個人攻撃である。敵は「越後のちりめん問屋の隠居」、水戸黄門。とにかく彼のやることなすこと、不愉快である。人の言い分も聞かず

非道な老人である。しかしそれらはまた小さなことだ。最大の問題は彼の行動の政治構造的特質にある。通常、黄門が糾弾するのは腐敗した地方官僚である。それを幕藩体制の代理人としての黄門が裁く。

時々草々

切腹に追い込む。処罰の宣言の前に不必要な暴力を過剰にふるう。自分の女性スタッフを毎週同じ時刻に風呂に入れて世間

とは「地方政治に小悪は存在しても、国家の最高権力は常に正しい」というものだ。しかし考えてほしい。悪代官の無法に対して国

越智 敏夫 (新潟国際情報大学 新潟国際情報学部 教授)

家中枢に責任はないのだろうか。また黄門が旅行中に遭遇する悲劇には当時の身分制に起因するも

悲劇の責任は、じつは黄門自身その一部である幕藩体制そのものが負うべきなのである。したがっ

来なら、制度を変革することによって悪代官の出現を阻止し、身分制の悲劇も低減させるべきなの

こうしてみると黄門は政治家としての責任を放棄し、地方の中間支配層をみせしめに切腹させつ

黄門様は誰の味方か

の多いが、その階級制度を利用してこそ幕藩体制は維持されているのではないか。

地方官僚一人を処分して済む問題ではない。本

ところが黄門には体制変革への意欲はまったく

だけ主張する悪魔のような権力者だということ

つまり彼の行動が示す根本思想

おち・としお 1961年愛媛県生まれ。立教大学法学部卒。慶応大学大学院政治学博士課程修了。96年、新潟国際情報大学講師。2006年に

現体制の「正しさ」を示そうとするのみである。体制が吸い上げた血税で文字通り「大名」旅行をする彼としては当然のこと

実質的には農業奴隷であった当時の民衆にとってこれほど邪悪な存在はない。こんな政治家を主人公にしたドラマを毎週放送しつづけることの影響は、視聴者自身が思うより巨大である。



教授。専門は現代政治学理論。

とかもしれない。

つづけることによって、自分に利益をもたらす中央政府の正当性がわかる。